

邦訳「マッチ売りの少女」の表現と文体（1）

*遠藤 仁・**宮田 夏帆

要旨

本稿では、明治期より親しまれてきた「マッチ売りの少女」の表現と文体のうち、特に文末表現に着目し、文語から口語へ、そして「読むための物語」から「語りかける物語」に変容していくプロセスをたどってみた。その結果、昭和20年代後半、折しも「岩波少年文庫」の創刊と相前後するかのように「デス・マス体」専用の軽快かつ安定した訳文に統一され、今日まで親しまれてきたこと、書きことばとしての規範性や形式性が強く作用した結果として、話しことばの標準化より20年あまりも早く訳文の現代口語化を完了していることが明らかとなった。

Key words： 文体、語り、文末表現、デス・マス体、デアリマス体

1. はじめに

子どものことばに即して音声言語と文字言語との違いを考えると、子どもが生をうけて本能的に獲得してきた、通常は書かれることのない音声言語をまずもってあげなければならないだろう。それは共通語・方言のみならず雅俗の別なく習得されてきた、いわば「生活語」としてのレベルのものである。学齢期に達するとその上に積み上げるように強い規範性をもった話しことば、さらには教科書や児童読み物に代表される形式的・保守的かつ規範性の強い書きことばが習得されていく。規範的書きことばは、子どもに対して望まれる規範であって、時代によって性質を異にするものの、極めて形式的かつ保守的なよそ行きのことばであった。書きことばは固定的性格をもち、それは伝承性や永続性に優れた特性をもちながらも、音声言語の史的变化に追従できないことは、両者の性格の違いを端的に表している。長い国語教育の歴史が、よりよく読み書くための書きことば教育の歴史にほかならなかったことを思えば、それは書きことばレベルでの子どものことばの規範性・統一性を促すことにはなっても、子どものことばとしての言文一致や話しことばと

しての純化・統一を促進するためには、必ずしも十分な力をもたなかったかもしれない。

邦訳「マッチ売りの少女」も当初は文語体で綴られるが、七五調など流麗なりズムを内包した文語文は、まさに「読むこと」が意図されており、あくまで規範性・保守性の強い文字言語を基調とするものであった。その意味では、難解な文言から子どもたちを解放する童謡復興運動、鈴木三重吉により大正7年（1918）に「赤い鳥」、翌8年に「こども雑誌」「金の船」、9年に「童話」が創刊され、北原白秋、西條八十、三木露風、野口雨情らが子どもの美しい心を育む詩を創作したことは、子どものための物語にとっても、「読むこと」からの解放、子どものためによりよく語ることに向けての大きなうねりではなかったかと考えられる。それはまた、規範性・形式性からの解放、生を受けてから育まれてきた生活語としての音声言語への回帰であるばかりでなく、子どものことばそのものを受け止め、子どもに向けたことばを見直そうとする姿勢の芽生えにもつながったのではないか。そして昭和の児童書・児童雑誌の普及と大衆化を経て、戦争による統制、さらに戦後の現代児童文学の復興により、改めて現代の語り形成されていくのではないか

* 宮城教育大学 教科内容学域 人文・社会科学部門（日本語学）

** 宮城教育大学大学院 専門職学位課程 高度教職実践専攻

との見通しをもちつつ、以下では邦訳「マッチ売りの少女」の用語と表現、とりわけ文末表現に着目して、子どもに向けた訳文の確立がどのようになされてきたのかを跡付けてみたい。

2. 明治期の邦訳——文語文からの脱却と文体の模索

児童文学翻訳大事典編集委員会（2007）で川戸道昭は、明治期アンデルセン童話と『ナショナル・リーダー』には深い関わりがあることを述べている。すなわち、アンデルセン童話の邦訳として最も古いヤスオカ・シュンジロウ訳「王の新しき衣装」(『ローマ字雑誌』1巻18号、明治19年)や巖本善治訳「不思議の新衣裳」(『女学雑誌』第100号、明治21年)は、『ナショナル・リーダー』の英訳本文にもとづいて翻訳され、そうした訳出方法は『女学雑誌』『少国民』などの一般誌にとどまらず『国語読本』にまで及んでいること、また時期を同じくしてソルデ(David Soldi)氏の仏語訳にもとづく邦訳もみられることから、明治42年以前の訳文は、このいずれかが典拠となっていることが明らかにされている。ちなみに川戸道昭・榊原貴教編(1999)所収のヤスオカ・シュンジロウ訳「王の新しき衣装」を翻刻文で引用すると、次の通りである。

今は昔、ある国に一人の王様ありけり。ことのほかに御召し物の美しさを好みたもう御癖ありて、つねづね御衣の善し悪しにのみ御心を留めたまい、終日御衣裳部屋に入りたまいて、あれのこれのと着飾り見比べたもうことも多かりき。

和語を基調としながらも俗語を忌避して雅語的表現をとり、説話の常套的形式を借りている。説話の形式であるから、もちろん「語る」ことと無縁ではないが、書記言語としての「形式」からいまだ解放されることはなかった。しかし、巖本善治訳「不思議の新衣裳」(『女学雑誌』第100・101号、明治21年)では、次のような訳文となっている。

或る國の天子さまは大層美しくしき衣物が大好きで毎日毎日化粧部屋に入つて半日は衣物を着換へたり何かにして暮されたと申すことで夫故華美立派なる衣服とては山の如く在りましたがまだまだ美しひものとあらば何れ程の金を出してもお買上になるとの評判高くありました。

女子の啓蒙書であったこともあり、文語調を残しながらも和文脈を基調とする柔らかな文体である。「～て(で)」「～が」などうねるように接続する長文は、やや口語体に遠い印象はあるものの、かなり早い段階で言文一致を実現していることは確かである。川戸は、「それまでにない斬新な語り口の文章になっている」理由として、「西洋の文学作品の翻訳であったがゆえに、自由な発想に立ってその訳文を創出することができたのである。」と述べている。「しかし、それだけでは、旧文学の伝統に支配された明治の作家たちの意識を変えるところまでは至らなかったろう。」と、それが言文一致運動とは必ずしもかみ合わなかった事情を指摘する。

さて、川戸道昭(1999)によれば、「マッチ売りの少女」の本邦初訳は、1886年(明治19年)に河瀬清太郎によって英語から訳された「小サキ燵火木賣ノ女兒」とされ、『ニューナショナル第三読本直訳』(開新堂・十字屋)の第四十三章に掲載されたものであった。このリーダーは、英語学習用の教本として独習書などの副読本とともに最も広く用いられたとされる。その本文は、

其レカ甚タ寒クアリシ其レカ雪降りシ而シテ暗クナルベク始メツ、アリシ而シテ其カ又タ大晦日ノ夜テアリシ (紐育今夕新聞)

寒サ及ヒ暗サノ中ニ憐レナル小サキ女兒カ裸頭及ヒ赤脚ヲ以テ街ヲ吟行ヒツ、アリシ

と、「其レカ」「アリ」「シ」「而シテ」などの用法から、あくまで原文に機械的に日本語をあてたに等しく、森岡健二(1999)のいう欧文訓読方式の原初的な姿とみられる。打消表現においても、

一人モカ終日彼女ノ何等ノ燵木ヲモ買ハナダリシ一人モカ彼女ニ一ノ単ナル邊尼ヲ與ヘナダリシ

飢及ヒ寒ヲ以テ蒼ク憐レナル小サキ女兒カ雪ノ大ナル片ガ彼女ノ顔ノ周圍ニ牽レル彼女ノ黄色ノ頭髮ヲ蔽ヒツ、緩歩セシ乍併ソレカ彼女ニソレニ就テ考ヘルベクターノ愉快ヲ與ヘザリシ

と打消に「ザリ」、打消過去に「ナダ」が用いられるなど、あくまで読まれることを前提とし、原文理解に資する正格な文語文であった。独習用副読本も含め、そもそもリーダーの訳文は、外国語の学習を支える補助的役割を担うものに過ぎなかった。欧文直訳体は、

抽象名詞・指示代名詞の使用、使役・受身などのヴォイス、関係代名詞や比較級の訳出にかかわる表現法など、およそ子ども向けとは程遠いところでの模索がなされた特殊な文体であった。

リーダー以外では、はやし家竹葉による「可憐の燃木売」(明治27年)が早い。福沢諭吉の『世界国尽』を彷彿とさせるような口誦しやすい七五調で綴られている。用語は比較的平易なものが用いられ、格調はありながらも、全編が文語調の響きをもっている。

頃は師走の大晦日、新年の前の日に、わけて此日は肌寒く、吹き来る風に雪交て、裂や肌も包かね、裸の頭裸足、歩行かねたる風情にて、哀れ可憐の乙女子が、只たうろうろと街道を徜徉つゝも出で来る。

打消表現においても、

折しも吹来る白雪に、哀れ光は消取れ、見ゆるは寒き壁の外、何ものも目に見へざりき。

と「ザリ」が用いられるほか、下二段活用「見ゆる」、形容詞連体形「寒き」、過去の助動詞「き」など、語法面からみれば、まさに文語そのものであった。

一方、明治20年代も末に至って「ダ・デアル体」で言文一致を試みるものも見られるようになる。太田玉茗の「まっち娘」(明治29年)は、

寒さは身に沁む雪はふる、日は段々と暗くなる、今宵は除夜の夕である。此寒空のしかも夕に、一人の小娘が何にも冠らず、何にも穿かずに全跣足で、市中をさまよひ歩いて居る。

と訳文は軽快になるものの、「兩手を蔽ふて」など東京語では一般的でないウ音便形、「研いた真鍮の如く」などの表現のほか、打消の助動詞に、

けれども今日は何人も買はぬ、又何人も今日は恵まぬ。

と「ヌ」を用い、文語調の響きを残す。上方系「ヌ」の衰退にともない東国系「ナイ」が勢力を拡大するところに明治期東京語のひとつの特色を見出しうるのであるが、いまだ交代には至っていない。

明治30年代には「デス・マス体」が台頭し、百島冷泉の「マッチ売娘」(明治36年)で口語調のよどみない訳文がみられる。

雪がドンドン降る大晦日の夕景、

「マッチやマッチ、マッチはいかゞ？」

と、傘もささずに、素足のまま市街を歩行してる、マッチ売の小娘がゐりました。

また、注目すべき点として、

聲を潤らして、

「マッチやマッチ、マッチはいかが？」

が、今日は一日中から賣れない、また誰あつて一錢銅貨一個、この娘に與るものもありませんかつた。

と、孤例ながら若松賤子訳「小公子」で知られる斬新な口語的表現もみえる。冷泉が5年後に刊行した『赤靴物語』所収の「マッチ賣娘」(明治41年)の同一箇所は、

その小娘はまたも聲を潤らして、

『マッチやマッチ、マッチはいかゞ』

といつて賣り行いたが、今日は何うしたものか一つも賣れないのだ。それで小娘は何か悲しいやうな気がしてならなかつたけれど、何も賣らずにそれなり家へ歸れば、何なに父様に叱られるかわからない、それで尚聲を潤らして賣つて歩行いたが、何うしても賣れないのである。

と「ダ・デアル体」に改められている。百島冷泉は、トルストイの翻訳ほか子ども向けの作品を多く手掛けるなど筆の立つ人であつたらしく、明治36年の訳文は、日本基督教会の機関紙『福音新報』に寄せた、万人に通ずるわかりやすい口語を駆使した大胆かつ実験的な試みとみられる。

ちなみに若松賤子訳「小公子」は、『女学雑誌』227号(明治23年)によれば、

セドリツクには誰も云ふて聞せる人が有ませんかつたから、何も知らないでゐたのでした。おとつさんは、イギリス人だつたと云ふこと丈は、おつかさんに聞て、知つてゐましたが、おとつさんの歿したのは、極く少さいうちでしたから、よく記憶して居ませんで、たゞ大きな人で、眼が浅黄いろで、頬髯が長くつて、時々肩へ乗せて坐敷中を連れ廻られたことの面白かつたこと丈しか、ハツキリとは記憶てゐませんかつた。

と、新しい時代を担う若い女性たちに向け、規範や形式にとらわれない生の生活語で訳出した、まさに語るように書く新たな文体の創出とみられる。これを言文一致運動の流れに絡めて説明することは難しく、バーネットが1886年に『Little Lord Fauntleroy』を著し

てからわずか4年後に原文から当時の生活語に一気
に昇華させた文体とみるのが妥当であろう。「マセン
カッタ」は、小島俊夫(1959)が指摘するように、す
でに幕末の人情本に例の見える「マセンデシタ」「マセ
ンダッタ」を母胎とする、ごく軽い敬意を含む口語体
として市中の口語レベルではごくふつうに行なわれて
いたものを訳文に反映させたとみられる。また、冷泉
の訳文には、

この娘は我家に歸らうとしませんでした。
マッチはから賣れず、一錢ももうからないから、
平常の通り賣ずに歸宅れば、父様に撲られるにき
まつてるので。それに我家に歸へつた所で、屋根
は腐さつて雪は降りこむ、戸や障子は破れて、寒
風ははいる、その寒さは、どのみち市街と、さう
變つたことはないで。

と、通常は後接することがらの原因を添える「ノデ」
を倒置的に用いることにより、柔らかな余韻をもた
らすような表現効果がねらわれている。これは客観的に
因果関係を示す「カラ」とは、やや異なる語感である。
打消表現も「ナイ」が現れる一方で、連用中止法とし
て「ズ」も併用され、単独で用いられるほかに、助詞
「ニ」「ト」を後接させる例も少なからずみられる。打
消過去についても、

綺麗な雪は房々した、長い黒い、立派な髪毛に
降りかかります、けれど小娘は立派ともまた寒い
とも思はなんだでせう。

など「ナカッタ」に移行しきれておらず、言文一致を
はかりつつも、文語臭は払拭しきれていない。同年に
『明星』に発表された相馬御風訳「まっちの光」(明治
36年)では、

- ・家を出るときには母のおさかりで足には合はぬな
がらも、
- ・朝から出てまだ少しも賣れぬのであろう、可哀相
に、今時になつても家へ歸らず
- ・あゝ、こんなに寒いのになぜ家へは歸れないのだ
らう？

と「ズ」「ヌ」「ナイ」が混用され、打消表現におけるせ
めぎ合いがみられる。『日本国語大辞典(全13巻)』の
「ない」の項において「国定教科書では『尋常小学読
本』(明治40年=1907)以来、「ない」が優位を占める
ようになり、今日普通の口語文では、特別の場合ほか、
ほとんど『ない』である。」と指摘されよう、明治

時代中期は「ヌ」から「ナイ」へ、打消過去の「ナン
ダ」から「ナカッタ」へ、当為表現「ズハ」から「ナ
ケレバ」へ移行しつつある時期であった。

明治42年に刊行された雨谷幹一訳「マッチ賣娘」
では、「デス・マス体」を基調としながらも、

三本目のマッチを摺ると。前に大きなクリスマス
の飾木が顯はれて、其飾付けの具合が、兼て或
豪家の窓から見た飾木と同じ様でありました。

と「デアリマス体」がみられるようになる。翌年刊行
された和田垣謙三・星野久成訳「マッチ賣娘」(明治
43年)にも、

寒い寒い大晦日の晩でありました。

と「デアリマス体」が現れることは注目される。「デ
アリマス体」は「デアル」の丁寧体として戦後間もな
くのところまで、およそ40年にわたってみられる。童話
の世界では決して珍しいものではなく、たとえば坪田
譲治「魔法」(昭和10年)にも、

- ・しかし、またいつの間にか、どこからかしら舞ひ
出て来るのであります。
- ・ケシの花は美しくても、このケシぼうずは、きみ
のわるいものであります。
- ・どこに魔法があるのか、よく見たいと思ったから
であります。
- ・ところで、その翌日のことでありました。
- ・その日の午後のごとであります。

と5例見られ、「時」を明示したり、理由や様態をや
や断定的に説明したりする場合のもってまわった言い
回しとして用いられている。「魔法」の草稿と鈴木三
重吉が手入れをした『赤い鳥』掲載本文とを比較検討
した山根知子(2009)によれば、三重吉は漢字表記や
かなづかいに至るまで子細に手入れを行ない、文末表
現も「これを聞くと、三平も黙って居りません。」か
ら「これを聞くと、三平も黙ってゐません。」など少
なからず手直ししているにもかかわらず、「デアリマ
ス」には一切手を加えていない。それは自身の「マッ
チ売りの少女」の訳文には「デアリマス体」を一切用
いなかった三重吉にとっても違和感なく受け止められ
ていたことを示唆している。詩人で児童文学者の与田
準一は『坪田譲治童話全集』第13巻の解説の冒頭に次
のように記している。

坪田譲治氏の『かっぱとドンコツ』は、子どもの
ころの思い出ばなしであります。

与田は1905年に生まれ、80歳を超えた頃に執筆した作品解説の冒頭に現れた用例である。与田にとっては既知の情報をそれが未知である読者に対して教えるように語りかける、もってまわった語り口とみられ、男性的で改まりの語感をもつ表現として用いたのである。

小島俊夫(1959)は、「デアリマス」が「デアル」のていねいな形にほかならず、『『デアル』が武士・中流以上の町人・花柳界の人人等の男女各階層を通じて、用いられている事実」もありながら、

「デアリマス」が、最初に、遊里言葉として発生し、かつ、一般市民の口頭語となり得なかった事情は、恐らく幕末から明治初年にかけて、『ていねい』の表現が分化発達していく(先学諸氏のすでに述べておられる所)途上において、未だ「デゴザイマス」が一般市民の「ていねい」表現を独占してゆずらなかつたためではあるまいか。しかし、市民は次第に「デゴザイマス」—「ダ・デア」の中間のていねいさを持つことばを必要とするようになって行った。

と述べる。塩澤和子(1978)も文部省編纂『尋常小学読本編纂趣意書』(明治37年)に触れて「標準語の練習を意図する余り、話しことば独特の煩瑣な待遇法を見童に教えようとして、これらを文章から切捨てることができなかつたようである。」と指摘するように、同書には、

三 口語二種々ノ體アリあります=ございます、てゐます=てをります、てゐる=てをる、です=であります=でございます、である=だナト是ナリ此中あります=ございます、てゐます=てをります、です=であります=でございます等ハ各敬意ヲ表ス程度ニモ差異アルカ故ニ其何レヲモ捨テス皆適應セル箇所ニ出セリ又である=だニ於テであるハ普通ニ地ノ文ニ現レダハ對話語ニ現ルルカ故ニ亦之ヲ區別セリ

との記載がみられる。田中章夫(1991)は、日本語の標準化には学校教育とはほぼ並行して進められた軍隊による教育も大きく寄与したことを指摘しているが、「デアリマス」が男性語かつ軍隊ことば的硬さを持ち、「デゴザイマス」は幕末以来の女性語的な色合いを含むのであれば、先の待遇表現の系列は、始めから体系としての危うさを内包していることになる。

近藤敏三郎訳「燐寸売の小娘」(明治44年)は、
手も足も振断れる程寒い、雪の引切りなしに降り積る、真暗な大晦日の夜のことで御座います。

と「デゴザイマス体」に加えて、
如何に寒いからとて勝手に自分の家へ帰ることが出来ないので御座います。

と打消「ン」を用いたり、「ペタリペタリと大きな上靴を引摺りながら」「以前のやうに四辺がパツと明るくなりまして」などオノマトペによる感覚的かつ臨場感あふれる描写を行なったりするほか、本来、句点で区切るべきところも読点による休止とし、長めの文をうねるような口語調で語る、いわば講談調の文体がとられる。

上田万年「木燧売」(明治44年)は、
恐ろしく寒くって、雪が降って、真暗になって来た、それは夕がたであったのだ——而も大晦日の晩であったのだ。

其寒い暗い中に小娘が一人、頭も足も露出しにして、町の中をばうろついていた。尤も家を出がけには上靴を穿いて居たのだが、馬鹿に大きいので余り役には立たなかつた、大いにも何にも、是迄母親が穿いて居たんだもの、それに恐ろしく早く駆けて来る二台の馬車を避けやうとして、町を横切る拍子に、小娘はその靴も失ってしまった。その中の片方は失じまじまじになったが、尚一つの方は、男児が引摺って、おれが小児を有つたら此を寢床にしやうと云ひながら、何処かへ行つてしまった。

と、冒頭からノダ文で始まるという特異な体裁をとる。「ノダ・ノデアル体」は、太田玉茗の「まっち娘」(明治29年)でも、

尤も家を出た時には、揃った半靴を穿いていたものゝ、母のであるから非常に大きく、もとより物の役にも立たぬが、二両の馬車の疾駆し来るを、慌て、避けた其はづみに、一個は行方知れずとなり、一個は子供が拾ひあげて、赤子ができたら摇篮にしやうと、奪つて行つてしまったのである。

と1例みられるほか、相馬御風訳「まっちの光」(明治36年)で、

- ・家を出る時には、母のおさがりで足には合はぬながらも、上靴を穿いて居つたのであるが、
- ・が、朝から出てまだ少しも売れぬのであらう、

・そして肉刺とナイフを胸にさされたまゝ、此哀れな少女を慰め顔によろよると歩いて来るのであった。

・『あゝ、何人が死ぬのだ！』

と少女は誰に云ふとなくつぶやくのであった。

ほか4例みられる。「ノダ・ノデアル体」には、断定や否定のニュアンスを強めたり、要点をまとめたりしたうえで、伝達の語調を強める表現効果を有するため、短文かつ無駄のない表現で淡々と叙述する点において有効であっても、語調が強く、語りとしての柔らかさを著しく欠くと言わざるをえない。

上田はドイツから帰国してほどなく『国語のため』（明治28、36）を通じて国語が国家の言語にほかならないことを述べ、母なることばとして尊重すべきことを説いた。折しも文部省内に国語調査委員会が設置され、標準語の要請に応えるべく全国調査を実施し、それは『口語法』（大正5年）、『口語法別記』（大正6年）として結実する。また、上田は『作文教授法』（明治28年）で子どもには言文一致により、自己の発することば通りに書かせるべきであり、いわば生活語として習得してきた方言の使用も許容するとともに、普通文や擬古文などの形式を押し付ける指導は好ましくないとの形式主義的な指導のあり方に批判的な立場をとる。そうした背景も踏まえて模索された訳文であったろうし、冒頭の「恐ろしく寒くて」などの言い回しほか、和語を基調とし、オノマトペを多用するなどの工夫からも言文一致への志向性を看取できないわけではないが、いまだ読み物の域を出ないものといえよう。

名知一馬「燐寸売少女」（明治45年）では、

或る貧乏な家の少女が、帽子も被らず、靴もはかないで、

と打消の助動詞「ナイ」が認められるほか、文末表現は「デス・マス体」を基本としながら、

手にも一束持って、『燐寸や燐寸』とあはれな声で呼びながら、歩いてゐるのです。

そこで、少女は、足を伸ばして暖めようとしたが、火は忽ち消えて、燃えさしの小片が手に残ったばかりでありました。

と「ノデス」に加えて「デアリマス体」も併用されている。

以上のように、明治期の邦訳は、あくまで英文の理解に供する文語文としてその端緒は開かれ、やがて

「デアル体」に転じるものの、「読むための物語」からの脱却には至らなかった。この間、「マセンカット」のような邦文脈の系譜を必ずしも継ぐものでないがゆえの清新な口語訳や「デアリマス体」の台頭などにより、読み手・聞き手意識の顕然化が促された。一方で「ダ・デアル体」「デス・マス体」「デアリマス体」が混在・混用される時期が続き、さながら文体の模索期ともいうべき状況を呈している。塩澤和子（1978）によれば、第一期の国定国語教科書（明治37年～）では、「『デアリマス体』を用いて書いているものや、文体が統一されず、「です・ます」「であります」「でございます」などを混用した文章も見える。」とし「このようなきこちなさを含んだ第一期の文章が、第二期になると、著しく洗練されてくる。」とするものの、「マッチ売りの少女」の訳文を見る限りにおいては、太田玉茗「まっち娘」（明治29年）以降、混用・模索期というべき時期が20年あまりも続いている。また、明治30～40年代は、いわゆる言文一致運動の最盛期であり、文芸思潮の面から見れば、自然主義の名だたる作家たちの活躍した時代でもあった。そうした写実主義に根差した表現法が翻訳文の文体に及ぼした影響については、改めて検討の機会を設けたい。

3. 大正～戦前期の邦訳——併用期から統一へ

この期は、識字率の向上を背景とした活字文化の隆盛に支えられ、出版事情も大きく変化したといわれる。本が売れるようになったばかりでなく、外国文学の翻訳も盛んになり、美しい装丁の家庭ぐるみで楽しめるような本も出版されている。下川歌史編（2002）によれば、明治35年に「小学校の就学率が91.6%で、初めて90%を突破。ただし通学率は68.4%。」、大正4年に「小学校の就学率がほぼ100%に達する。」とある。この期は文体面でいえば「デアル体」と「デス・マス体」「デアリマス体」とが混在・混用される段階から「デス・マス体」と「デアリマス体」とが長期にわたって併用される時期を経て、「デス・マス体」への統一に向かっていく。学校教育の普及・発展は、その動きを後押しすることとなる。

松本雲舟編『家庭物語』（大正2年）に収められた「マッチ賣の少女の話」は、

非常に寒い。雪が降つて、もう暗くなりさうだ。

晩ばんになった。大晦日おほみその晩ばんである。寒い暗さむい中くらを、
 憐あはれな小ちひさい女をんなの兒こが何なにも被からずに素足すあしで街まちの中
 を歩あるいてゐた。

と「ダ・デアル体」で淡々と叙述される。子どもに向けた文体ではなく、まだ外国の読み物が珍しかった時代にあって、家庭における再話が期待されたものと考えられる。長田幹久訳「マッチ賣の娘」(大正6年)では、

恐おそろしく寒さむい晩ばんである。雪ゆきは降ふっているし、も
 う四邊あたりは薄暗うすくらくなってきた。しかもそれは一年の
 一いち番終ばんひの大晦日おほみその晩ばんであつた。この寒さむい暗くらい夕
 闇やみを一人ひとりの娘むすめが、頭あたまには何なんにも冠かぶらず、裸足はだしで往
 来らいを歩あるいて来きました。家うちを出でた時ときには、上靴うはぐつを穿
 いてゐたが、それも死しんだ母親はやおやの靴くつで、大おほき過すぎ
 るために、さそばき傍ばを二臺だいの馬車ばしゃが、恐おそろしく早
 く通とほっていっただ拍子ひやうしに、急いそいで往来おうらいを突切つらうと
 して、その靴くつを無なくしてしまつたのです。片方かたっぽうは、
 どこかへ見みえなくなり、片方かたっぽうは男をとこの子こに泥どろだらけ
 にされてしまひました。

と文末表現は混用され、なんらの規則性も見出せない。『赤い鳥』に掲載された小宮豊隆訳「マッチ賣の娘」(大正8年)は「デス・マス体」で統一されるが、樋口紅陽訳「可哀相な燐寸賣の娘」(大正10年)では、
 手ても足あしも振断ちぎれる程ほど寒さむい、雪ゆきの引切ひきりなしに降
 り積つもる、真暗まっくらな大晦日おほみその夜よるのことで御座ございます。

と荘重な語り口ではじまり、
 ・此この娘うちは家うちを出でる時ときには上靴うはぐつを穿はいてゐましたので
 すけれど、
 ・あゝ、何なんとまあ哀あはれな光景きやうけいでは御座ございませんか！
 ・これは大晦日おほみその夜よるを明日あすのお目出度めでたしい年むかを迎へん
 が為ためめ、家族たがの者共ものどもが楽しい夜食やしよくの真最中まっさいちゆうなので
 御座ございませう、けれど寒気さむざの為ためめに知覚ちかくを失なくし
 かけた此この娘こには、最早も何なんの食欲しょくよくなど動うごきませう
 か。

と段落の末尾の文を中心に「デゴザイマス体」を織り交ぜて、丁寧な語り口で語られていくなど文末表現には多様性がみられる。芥川龍之介「蜘蛛の糸」のような統一感はないが、「語り」への志向性は見て取ることができる。少年通俗教育会編「マッチ売娘」(大正11年)では、冒頭の一文のみであるが、

ああ さむ さむ おほみそ か ばん
 或る寒あい寒さむい大晦日おほみその晩ばんであります。

と「デアリマス体」で口火が切られ、明治40年代以降、

「デアリマス」が途切れることなく継承されていることがわかる。ヨウネン社編「マッチ賣の娘」大正13年にも、

- ・それは一年も一ねんばんおしまひの大晦日おほみその晩ばんでありました。
- ・すると、その拍子ひやうしにマッチが消きえて、目めの前まへには厚あつい、つめたい壁かべが残のこっているばかりでありました。

と2例認められ、「デス・マス体」に「マイリマス」も織り交ぜながら丁寧な語り口で語られている。「デアリマス体」の混在するテキストには、「ノデス・ノデシタ」も出現する傾向が認められ、「デアリマス体」の性格を考えるひとつの手掛かりとなるかもしれない。

竹友藻風訳「マッチ賣の娘」(大正13年)、吉江孤雁訳「小さなマッチ賣の娘」(大正13年)はデアル体で一貫しており、筋立てを淡々と叙述する文体には、硬く突き放した感がある。大正期ははまだ常体が大半を占めるなかであって、オトギ会編「フシギノマッチ」(大正13年)、屋島史郎編「マッチ賣の少女」(大正14年)以降は、ほぼ「デス・マス体」で統一されるようになる。ただし、後者においては、

けれどそれあたで温まるどころか、一層寒そうさむくなるばかりでしたが、それでも少女せうぢよは家いへに歸かへらふとはしませぬでした。それと云ふのは、今朝けさから一束いっさくのマッチも賣うれなかつたものですから、家いへに歸かへらうものなら、きつと酷ひどいお父とうさんに打うち叩たたかれるにきまつてゐるからです。

と、実際の音声はさておき、強い規範意識がはたらいた結果として、一貫して「ぬ」で表記されている。書きことばのもつ強い規範性・保守性のあらわれとみられる。

太田黒克彦訳「マッチうりのむすめ」(大正15年)には、

- ・ゆきが チラチラ ふつてゐる たいそう さむい ばん で ありました。

・そのばんは クリスマスの ばんでありました。

デアリマス体が、

- ・むすめは そのろぢへ はいつて行つて かゞみましたが、さむさは やつぱり おんなじで ありました。

- ・すこしでも あたたまらうと おもつたので あります。

- ・それは しんだ おばあさんが いつか むすめに、「おほしさまが とぶのは 人の たましひが 天に のぼるのです」と をしへて くれたのをおもひだしたからで あります。
- ・この おばあさんは この世の中よのなかで たつた一人むすめをかあいがつて くれた 人で ありました。
- ・むすめは しだいに おなかの すいたのも さむいのも なにもかも わすれて、そのまゝ てんごくへ 行つたので あります。
- ・あくる日は しんねんで ありましたが、しんねんの あさ日は この ろぢの すみで しんで いる マッチうりの むすめの しがいを かなしさうに てらして みました。

とデアリマス体が8例見られ、うち2例は「ノデアリマス」の形をとって、やや改まった、もってまわった口吻が感じとれる。

鈴木三重吉の手になる「まっち賣りの少女」(昭和2年)は、

十二月三十一日の夕方がせまつてきました。それは、おそろしく寒い、雪ふりの日ゆきふがたで、あたりは、もう、ほとんど、まっくらでした。

その寒気かんきと暗くらがりとの中なかに、一人ひとりの、まづしい小さな少女ちひ しょうじよが、帽子ぼうしもかぶらず、赤あかはだしのまゝで、街々まちをさまよひあるいてりました。

と「デス・マス体」で貫かれている。菊池寛編「幼いマッチ賣り」(昭和3年)、日本童話研究会編「マッチうりのむすめ」(昭和4年)も「デス・マス体」で統一されているが、入交総一郎編「マッチ賣りの少女」(昭和4年)では、

まづしい少女せうじよも、家を出るときには、たしかに、靴くつではなかつたが、スリツパをはいてりました。が、この少女せうじよには何の役やくにもたちませんでした。それは、お母さんがはいてゐた大きな、大きなスリツパでりましたから。

ほか「デアリマス体」6例みられ、「デス・マス体」と混用されている。林修之介訳「あはれなマッチうりのむすめ」(昭和5年)においても、

- ・おそろしく さむい日で ありました。
- ・それは、一年の 一ばん おしまひの おほみそかの ばんで ありました。
- ・それは、 マッチうりの むすめで ありまし

た。

- ・お父さんには きつと ぶたれるし、 それに、家へ かへつても さむいのは おんなじことで ありました。
- ・かべは ところどころ おちて、 そこから つめたい かぜが びゅうびゅうと ふきこむので、 家の中も そととおなじ さむさで ありました。
- ・むすめの 手に のこつたのは、一本の マッチの もえがらで ありました。
- ・ろうそくは いく千本せんぼんとなく、 みどりの えだの あひだにちらちらと かがやいて、 まるで、 うつくしい 糸のやうで ありました。
- ・むすめは その時の はなしを おもひだしたで あります。
- ・それは、 おばあさんを ここに ひきとめて おきたかつたからで あります。

と9例認められ、一文一段落で「時」「所」など物語の重要な要素が語られる場面、3例目のように言い換えて総括する文脈に加えて、4・5例および「から」に後接する9例目のように「理由」の提示も含めて印象深く強調して文を終止させる際などに用いられる傾向がある。

谷口武編「まっち賣りの娘」(昭和6年)にも、娘がその上うへに手をかざすと、小さな蠟燭らふそくの火のやうに、あたゝかい明あかるい炎ほのほでりました。しかも、それは不思議な光で ありました。

ほか3例見られる。戦前の資料としては最後の千葉省三・中山清佐編「マッチ賣りの娘」(昭和7年)は「ダ・デアリ体」がとられ、

とても寒い日さむい びであつた。雪が降ゆきつてゐて、もうぢきに日は暮ひれて暗くらくならうといふ時ときであつた。としの暮とし くれ、おほみそかの 晩ばんであつた。

と、『小学童話新読本5年生』として編集されたものであるから、児童向けで口語的かつ平易な叙述ではあるものの、読本としての性格上、語りが志向されることはなく、あくまで読むための物語として構成されている。

なお、大正末期から戦前にかけて、かな(カナ)書きで分かち書きされたテキストが見られるようになる。就学率の向上とともに、国定教科書の表記法、すなわち学校教育との関連でとらえるべき表記法とみられ

る。

松崎安子(2002)によれば、国定修身教科書においては、第一期(明36)に7.7%、第二期(明43)に6.6%をしめた「デアリマス体」も、第三期(大6)に至って2.8%まで減少し、「デス」止めの文末表現が、第一期(明36)0.6%、第二期(明43)3.3%、第三期(大6)に至って9.1%まで増加していることが明らかにされている。「デアリマス体」は、国定修身教科書においては第三期(大6)にほぼ終息に向かったと考えられるが、「マッチ売りの少女」においては、決して大きな数値の動きとは言えないながらも、下表の通り、大正時代後半より、むしろ増加傾向に転じている。

発行年	資料名、編・訳者	用例数
1909(明42)	マッチ売娘、雨谷幹一訳	3
1910(明43)	マッチ売娘、和田垣謙三・星野久成	1
1912(明45)	燐寸売少女、名知一馬編	1
1922(大11)	マッチ売娘、少年通俗教育会編	1
1924(大13)	マッチ売の娘、ヨウネン社編	2
1926(大15)	マッチ売りのむすめ、太田黒克彦訳	5
1929(昭4)	マッチ売りの少女、入交総一郎編	7
1930(昭5)	あはれなマッチ売りのむすめ、林修之介訳	8
1931(昭6)	マッチ売りの娘、谷口武編	4
1947(昭22)	マッチ売りの少女、岡田陽編	5
1947(〃)	マッチ売りの娘、酒井朝彦訳	7
1948(昭23)	マッチ売りの女の子、藤井樹郎編	13
1949(昭24)	マッチ売りの少女、長沼依山訳	1
1950(昭25)	マッチ売りの小娘、中山一郎訳	1
1953(昭28)	マッチ売りの女の子、大木雄二訳	4

「デアリマス体」が、なぜ子ども向け読み物に用いられ続けたのか。先述の通り、軍隊ことばとしての威厳ある言い回し、子どもの目に映る軍人の威光などの時代背景に加え、学校教育と並行して行なわれた軍隊によることばの標準化も強く影響し、戦後色の薄れ始める時期まで、「デアリマス体」はその命脈を保ったのであろう。語り手が物語を邪魔しない黒子と化するのは、昭和20年代後半以降、まさに現代の特色と考えられるのである。

なお、浜田廣介訳「マッチ売りの少女」(『アンデルセン童話(ひろすけ幼年童話全集8)』、昭和45年、集英社)にはデアリマス体が5例みられる。この本文は『浜田廣介全集10』(昭51、集英社)にも収載されて

いるが、初出誌等が不明で訳出年代を特定できないこと、今回の調査で「デアリマス体」が見られなくなるとしばらく後の例であること、廣介が亡くなる3年前の刊行であること、廣介は早稲田大学英文学科在学中にすでにアンデルセン童話の翻訳を手掛けており、『世界童話選集(新訳世界教育名著叢書第9巻)』(大正14年、文教書院)、『雪の女王(世界家庭文学全集1)』(昭和5年、平凡社)など早くから編訳書が編まれていたことなども勘案すると、訳出年代はかなりさかのぼる可能性があることを指摘しておきたい。

4. 戦後の邦訳——「デアリマス」体の終息と現代口語文体の確立

戦後はマスメディアの発展普及が子どもたちのことばのありようにも大きな影響を与えた。昭和40年代なかばには共通語化が自然達成され、「デス・マス体」で統一された訳文も安定期に向かうことになる。戦後のテキストでは、岡田陽編「マッチ売りの少女」(昭和22)で「デス・マス体」を基調としながら、

とてもさむい日の夕方、しきりに雪がふついているし、あたりはもうくらくらとうしていました。しかも、それは明日がお正月だという日、すなわち大晦日の夜でありました。

など5例の「デアリマス体」がみられる。酒井朝彦訳「マッチ売りの娘」(昭和22年)においても、

かういふわけで、娘は裸足(はだし)で、あるいてるのであります。

など7例見られ、尾括式の段落でおもに理由などを述べる際に用いられる傾向が認められる。平林広人訳「マッチ売りの少女」(昭和22)と矢崎源九郎訳「マッチ売りの少女」(昭和22年)はともに「デス・マス体」で統一されているものの、前者は、

- ・それはおそろしく寒い日でした。雪は降る、まつくらは日は暮れかかる、そのうえ今日は、としのせの大みそかでした。
- ・だが、その寒かつた夜があげると、その家の隅には、小さな女の子が、美しい顔をして、ほゝえみを口もとにたゝえて——死んでいました。
- ・だが、たれ一人、この子がどんな美しいものを見て、どんなに祝福されて、お祖母さんといつしよに、楽しい新年迎えたかを知るものはありません

でした。

と飾り気のない男性的な語り口であるが、後者は、

- ・たいへん寒い日でした。雪が降って、あたりはもうすぐぐらくなり始めていました。その日は一年のうちで一番おしまいのおおみそかの晩でした。
- ・夜が明けて寒いつぎの朝になりました。あの家のすみのところには、小さな少女がほほを赤くして、口元にはほほえみさえ浮かべながらうずくまっておりました。けれども死んでいたのです。

と柔らかく、より丁寧に女性的な語り口であるように思われる。同じ「デス・マス体」でありながら、接続詞「ダガ」や文語「タレ（誰）」ほか共起する語が総体として醸し出す味わいの違いと考えられるが、それについては別稿で改めて触れることとしたい。

浦口真左・山室みき訳「マッチ売りの少女」(昭和22年)は、「デス・マス体」で統一しつつ、

- ・でも、そんなものが何の役に立つでしょう？
- ・かわいそうな貧しい少女よ！

など符号の多用は戦後の特徴であり、

- ・マッチが一つも売れなくて、一銭もお金をもつて歸ることができないのですもの。
- ・まあ、よく火花を出して燃えたこと！

と柔らかい女性的な表現で、時に少女の視点と重ね合わせるような描写も織り交ぜながら語られていく。

楠山正雄編「マッチ売りのむすめ」(『豚飼王子』所収本文、昭和23年)には、

「どうぞ、あたしをいっしょにつれて行ってください、あたしわかっていてよ。このマッチがもえてしまうと、おばあさんは消えていってしまうんです。あたたかい、だんろの火や、おいしそうな焼鳥や、それからあの大きなすばらしいクリスマスの木とおなじようにね——。」

と、いわゆる「てよだわ言葉」で少女らしさを表わす工夫もなされているが、同年に同じ訳者が『おさるのめがね』に発表した訳文の同一箇所は、

「どうぞ いっしょに つれてつてください。あたし 知っています。このマッチがもえてしまうと、おばあさんもきつと あたたかい火やおいしそうなやきとりや それから りつばなクリスマスの木と おなじに、きえてなくなってしまうでしょう。」

とあるところをみると、前者は実験的な試みとみられる。「テヨ」は『日本国語大辞典』の「ってよ」の補注で「明治のはじめに東京の比較的下層の女性が用いていたのを、当時の女学生が盛んに用いるようになり、上流の家庭にも広まったものという。明治の半ばから新聞・雑誌などの男性による評論でしばしば、好ましくない言い方として批判の対象になっている。」とする。遠藤織枝・尾崎喜光(1998)によれば、1955(昭和30)年までの使用例は見つかったが、それ以後のものはない。」という。

藤井樹郎編「マッチうりの女の子」(昭和23年)は、これまで題目では「娘」「少女」とされてきたなかで「女の子」の初出例である。「女の子」自体は『日本国語大辞典』によれば『書言字考節用集』(1717)を初出とし、談義本や俳諧ほか、川端康成の「みづうみ」(1954)の例もあがっている。「娘—息子」「少女—少年」のペアと比較すれば「女の子—男の子」は指示対象が広いうえに、和語的でくだけており、「娘」「少女」など若い女性を限定的に指示する用法の獲得にやや時間を要したのであろう。このテキストは、「デアリマス体」の出現が15例と最も多く、

- ・かわいそうな、女の子は、おなかがすいて、おりました。その上に、からだもすつかり、つめたくなつてしまつて、いたのでありました。
- ・こんどは、女の子は、きれいにかざられた、クリスマスツリーの下に、すわつておりました。ろうそくが、何百本か、何千本かわからないほど、大きなクリスマスツリーに、かざられておりました。女の子がみたことのある、どんなお金持のクリスマスよりも、もつとりつばでありました。
- ・女の子は、うずくまつたままで、家へかえろうとは、いたしませんでした。

と、丁寧語「(て)おる」や「致す」と併用されるなど、口語的でありながらも荘重な語り口を感じさせる。長沼依山訳「マッチうりの少女」(昭和24)では、

おそろしくさむい日の夕方でした。

そとには、雪がしとしとふりつゝいて、あたりはうすぐらくなっていました。それは一年のうちで、一ばんおしまいの大みそかのばんでありました。

と冒頭の3文目に1例のみ「デアリマス体」がみられる。中山一郎訳「マッチ売りの小娘」(昭和25年)でも、

冒頭の1文のみであるが、次のような例がみえる。

おそろしくさむくて、雪がふって、日がくれて、
すっかりくらくらかりかけていて、しかも、それは
一年の終りの夕方でありました。

管見では、大木雄二訳「マッチ売りの女の子」(昭和28)が「デアリマス体」のみられる最後のテキストで、

- ・さむい さむい 日で ありました。
- ・くらい ところを、まずしい 女の子が ぼうしも かぶらないで、あるいて いました。あしも はだして ありました。
- ・女の 子は、マッチの たばを、もって いました。マッチを うる 子で ありました。
- ・のこったのは、てに もって いる、もえのこりの マッチの ぼうだけで ありました。
- ・けれども、マッチの ひかりの なかに、まるやきの がちょうや、クリスマス・ツリーや おほしさまや、やさしい おばあさんの かおが みえた ことは、だれにも わからないので ありました。

と5例を数え、状況や人物の属性、理由などを印象深く語っているように思われる。

大木惇夫「マッチ売りの少女」(昭和25年)、鈴木三重吉「マッチ売りの少女」(昭和27年)、平林広人訳「マッチ売りの少女」(昭和28)は「デス・マス体」で統一され、杉山さんしち訳「マッチ売りの少女」(昭和29年)も「デス・マス体」ではあるものの、

- ・まる一日じゅう、たれひとりマッチを買ってくれるものがありません。たれひとり、少女に一シリングもめぐんでくれる人もなかったのです。
- ・しかし、少女は、雪のかざりのことなぞ、考えるひまは、もちろんありません。

など文語調の響きを残す。「デス・マス体」への統一は、訳文の均質化を促す一方で、与田準一「マッチ売りの少女」(昭和26年)は、

まずしい少女のマッチ売り、町から町へ呼んでいく……

「マッチはいかがあ……マッチはいかがあ……」
今夜は楽しいクリスマス。どこも楽しいクリスマス。みんな楽しいクリスマス。だけど少女はマッチ売り、雪降るなかを呼んでいく、はだしのままであるいていく。

と七五調で散文詩風のつくりとなっており、翻訳を超

えた創作的味わいがある。

わが国で初めてアンデルセン童話を原典から翻訳した大畑末吉の訳文は、「デス・マス体」で統一されている。「マッチ売りの少女」(昭和24)は、

おそろしく寒い日でした。雪がふつて、あたりが暗くなりはじめました。この日はまた、一年の最後の日で、大みそかの夕ぐれでした。

と始まり、「岩波少年文庫」に収められた「マッチ売りの少女」(昭和28年)では、

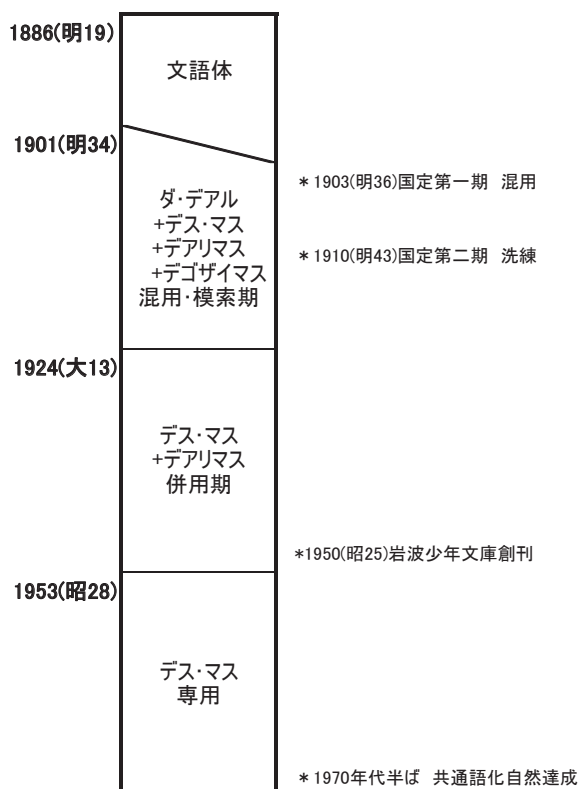
それはそれは寒い日でした。雪が降って、あたりはもう暗くなり始めていました。その日は、一年の一ばんおしまいの大みそかの晩でした。

と、より語り口が整えられ、滑らかな訳文となっている。ともに半世紀以上の時を隔てたものでありながら、語彙・語法の面において現代の児童もなら違和感を覚えることのない現代口語訳とみてよいだろう。昭和25年(1950)に記された後書き「岩波少年文庫発刊に際して」に、「私たちは、この宝庫をさぐって、かかる名作を逐次、美しい日本語に移して、彼らに贈りたいと思う。」「もとより海外児童文学の名作の、わが国における紹介は、グリム、アンデルセンの作品をはじめとして、すでにおびただしい数にのぼっている。しかも少数の例外的な出版者、翻訳者の良心的な試みを除けば、およそ出版部門のなかで、この部門ほど杜撰な翻訳が看過され、ほしいままの改削が横行している部門はない。私たちがこの文庫の発足を決心したのも、一つには、多年にわたるこの弊害を除き、名作にふさわしい定訳を、日本に作ることの必要を痛感したからである。翻訳はあくまで原作の眞の姿を伝えることを期すると共に、訳文は平明、どこまでも少年諸君に親しみ深いものとするつもりである。」との編集方針が示されている。「岩波少年文庫」創刊と相前後するかのよう「デアリマス体」との併用は解消され、山本藤枝『マッチ売りの少女』(昭和30年)ほか、昭和30年代以降の翻訳は、「デス・マス体」に統一された現代口語による訳文として、今に至るまで親しまれている。すなわち「岩波少年文庫」の発刊は、「デアリマス体」の終息を促すとともに、翻訳のあるべき姿を示し、訳文の浄化・安定化をはかるうえで大きな役割を果たしたであろうことが、訳文の変遷からも改めて確認されるのである。話しことばとしての共通語化の自然達成は、高度成長期に入った昭和40年代半ばと考

えられているが、書きことばのスタンダードは、それより早い昭和20年代後半に確立されたとすれば、ことばの標準化を考えるうえで極めて興味深い事実といえる。

5. おわりに

本稿では、「マッチ売りの少女」の邦訳本文のうち、主に文末表現に着目しながら、明治期以降、現代に至るまで、その変遷をたどってみた。下表をもってまとめに代えたいが、簡単に総括すれば、文語文を経て、明治20年代末から大正末にかけての20年あまりに及ぶ模索期、大正末期から昭和20年代後半に至るまでのおよそ30年に及ぶ「デス・マス体」と「デアリマス体」の混用期を経て、「デス・マス体」で統一された現代口語文体の確立をみたというのが大きな流れである。すなわち文語文体から子ども向けの現代口語文体が確立されるまで、およそ半世紀を要したということになる。また、文末表現の変遷から聞き手（読み手）意識のありようをも透かし見ることができる。常体で説明されるだけの読み手（話し手）不在期から演じ手・語り手の顕在化へ、そして「デス・マス体」専用期の黒



子化へと、文体はほどほどの軽さと丁寧さを半世紀にわたって追い求めてきたことになる。

本稿では、表現形式を中心に検討を進めたが、今後は用語の吟味、構成分析など内容に踏み込んだ考察を進めていきたい。また、娯楽的な子ども向け文章を扱ったため、国定教科書や一般の文学作品をよりどころとした研究とは、必ずしもかみ合わないところも多々みられた。そうした検証も後考をまつこととした。

文献

- 石川春江 (1972)「明治期のアンデルセンについて」参考書誌研究 (5)、国立国会図書館、原資料 (URL) <https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1283840/rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/05-06.pdf>、2021年9月8日閲覧
- 上田万年 (1895・1903)『国語のため』富山房
- 上田万年 (1895)『作文教授法』富山房
- 遠藤織枝・尾崎喜光 (1998)「女性のことばの変遷—文末・コト・テヨ・ダワを中心に—」『日本語学』17巻6号、明治書院
- 岡本夏木 (1982)『子どもとことば』岩波新書
- 川戸道昭 (1999)「明治のアンデルセン—出会いから翻訳作品の出現まで」『明治期アンデルセン童話翻訳集成』第5巻、ナダ出版センター
- 川戸道昭 (2008)「幕末維新期の西洋童話—英語リーダーを仲立ちとする外国文学の受容—」『東日本英学史研究 (日本英学史学会東日本支部紀要)』第7号、日本英学史学会東日本支部
- 小島俊夫 (1959)「後期江戸語における『デス』・『デアリマス』・『マセンデシタ』」『国語学』第39輯、日本語学会
- 佐藤宗子 (1998)「選ばれた『名作』—『岩波少年文庫』と『世界名作全集』の共通書目—」『千葉大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第46巻、千葉大学教育学部
- 佐藤宗子 (2011)「精選と洗練の産物—『教養』追求からみた『岩波少年少女文学全集』—」『千葉大学教育学部研究紀要』第59巻、千葉大学教育学部
- 塩澤和子 (1978)「明治期の国定国語教科書—一言文一致体の確定に果たした役割—」『上智大学国文学論集』11、上智大学国文学会
- 児童文学翻訳大事典編集委員会 (2007)『図説児童文学翻訳大事典 第2巻 原作者と作品 (ア〜ソ)』大空社
- 下川歌史編 (2002)『近代子ども史年表 明治・大正編』河出書房新社
- 田中章夫 (1991)『標準語《ことばの小径》』誠文堂新光社
- 坪田譲治 (1986)『坪田譲治童話全集 (全14巻)』岩崎書店
- 中村哲也 (1999)「若松賤子訳『小公子』の〈語り〉と文体」『国

文学解釈と鑑賞』第64巻7号、至文堂
 松崎安子 (2002)『国定修身教科書における文末表現』『言語科学論集』6、東北大学文学部日本語学科
 宮島達夫 (1999)『百年まえの口語文—「小公子」の文章—』『国文学解釈と鑑賞』第64巻7号、至文堂
 森岡健二 (1999)『欧文訓読の研究—欧文脈の形成—』明治書院
 文部省編纂 (1904)『国定教科書編纂趣意書』日本書籍
 山根知子 (2009)『坪田譲治 草稿「魔法」—解題と翻刻』『清心論文』第11号、ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会

資料一覧

発行年順に配列し、次の略称を用いた。K = 国立国会図書館デジタルレクシオン、S = 明治期アンデルセン童話翻訳集成、Z = 図説児童文学翻訳大事典
 河瀬清太郎「小サキ燧火木売ノ女兒」『ニューナショナル第三読本直訳』開進堂・十字屋、明治19年 (1886)、K・S
 島田奚疑「小サキ火奴賣ノ少女」『正則ニューナショナル第三読本』大倉孫兵衛、明治19年 (1886)、K
 和田松造「小サキ燧木売ノ女兒」『ニューナショナル第三リード直訳』辻本尚書堂、明治19年 (1886)、K
 亀井晴吉「小サキ摺附木賣ノ少女」『正則ニューナショナル第三読本』改進堂、明治20年 (1887)、K
 中沢柄一「小サキ燧火木賣ノ女兒」『ニューナショナル第三読本直訳』岩藤錠太郎、明治20年 (1887)、K
 元木貞雄「小サキ引火奴賣ノ童女」『ニューナショナル第三読本直訳』榊原友吉、明治20年 (1887)、K・S
 宮野権六「小ナル摺附木賣ノ少女」『ニューナショナル第三読本直訳講義』宮野権六、明治22年 (1889)、K
 はやし家竹葉「可憐の燃木賣」『智徳会雑誌』明治27年 (1894)、S
 太田玉茗「まっち娘」『文芸倶楽部 (臨時増刊)』明治29年 (1896)、S・Z
 元木貞雄「小キ引火奴賣ノ童女」『ニューナショナル第三読本直訳 意解挿入』榊原友吉、明治29年 (1896)、K
 中村道夫「年少なる燧木賣の女兒 (燧木賣の娘)」『ニューナショナル第三読本直訳講義』金刺芳流堂、明治34年 (1901)、K
 相馬御風「まっちの光」『明星』明治36年 (1903)、S
 百島冷泉「マッチ賣娘」『福音新報』明治36年 (1903)、S・Z
 菅野徳助・奈倉次郎「マッチ賣」『反魂鳥』明治40年 (1907)、S
 百島冷泉「マッチ賣娘」『赤靴物語』内外出版協会、明治41年 (1908)、K
 雨谷幹一訳「マッチ賣娘」『新おとぎ (世界新おとぎ)』武田文永堂・中島辰文館、明治42年 (1909)、K
 和田垣謙三・星野久成「マッチ賣娘」『教育お伽噺』小川尚栄堂、明治43年 (1910)、K・S

上田万年「木燧賣」『安得仙家庭物語』鍾美堂、明治44年 (1911)、K
 近藤敏三郎「燧寸賣の小娘」『アンダアゼンお伽噺』明治44年 (1911)、S
 名知一馬編「燧寸賣少女」『ポケット世界お伽噺』国華堂書店、明治45年 (1912)、K
 松本雲舟「マッチ賣の少女の話」『家庭物語』婦人之友社、大正2年 (1913)、K
 長田幹久訳「マッチ賣の娘」『アンデルセン御伽噺 (模範家庭文庫5)』富山房、大正6年 (1917)、K
 小宮豊隆訳「マッチ賣の娘」『赤い鳥』第二巻第一号、赤い鳥社、大正8年 (1919)
 樋口紅陽訳「可哀相な燧寸賣の娘」『アンダアゼンお伽噺』精華堂書店、大正10年 (1921)、K
 少年通俗教育会編「マッチ賣娘」『アンダアゼン物語 (世界童話第5集)』博文館、大正11年 (1922)、K
 オトギ会編「フシキノマッチ」『アンデルセン童話』資集堂、大正13年 (1924)、K
 竹友藻風訳「マッチ賣の娘」『世界童話大系 第四巻 北欧篇』世界童話大系刊行会、大正13年 (1924年)、K
 ヨウネン社編「マッチ賣の娘」『アンデルセン物語集 (課外読本 学級文庫1)』ヨウネン社、大正13年 (1924)、K
 吉江孤雁訳「小さなマッチ賣の娘」『金の星 (第六巻第四号アンデルセン傑作童話号)』ほるぷ出版、大正13年 (1924)、K
 奥野庄太郎訳「マッチうりのむすめ」『子どもアンデルセン (児童図書館叢書)』イデア書院、大正14年 (1925)、K
 楠山正雄訳「マッチうりのむすめ」『おやゆび姫 アンデルセン童話』富山房、大正14年 (1925)、K
 富山県新湊区域校長会編「マッチ賣の娘」『新課外読みもの 尋常第6学年用』富山県新湊区域校長会、大正14年 (1925)、K
 屋島史郎編「マッチ賣の少女」『泰西名話集』岡田文祥堂、大正14年 (1925)、K
 太田黒克彦訳「マッチうりのむすめ」『ひらがなアンデルセン』文園社、大正15年 (1926)、K
 鈴木三重吉「まっち賣りの少女」『アンデルセン童話集』アルス、昭和2年 (1927)
 菊池寛編「幼いマッチ賣り」『アンデルセン童話集 (小学生全集5)』興文社・文芸春秋社、昭和3年 (1928)、K
 日本童話研究会編「マッチうりのむすめ」『うさぎのしんばい (カナオトギ文庫22)』九段書房、昭和4年 (1929)、K
 入交総一郎編「マッチ賣りの少女」『解放群書 第34篇 社会主義童話読本』解放社、昭和4年 (1929)、K
 林修之介訳「あはれなマッチうりのむすめ」『ひらがなあんでるせんどうわ』金の星社、昭和5年 (1930)、K
 谷口武編「マッチ賣りの娘」『アンデルセン童話選集 (児童図書館叢書46)』玉川学園出版部、昭和6年 (1931)、K

- 千葉省三・中山清佐編「マッチ賣の娘」『小学童話新読本 5年生』日本図書出版社、昭和7年（1932）、K
- 浦口真左・山室みき訳「マッチ賣りの少女」『野の白鳥 アンデルセン童話集』民風社、昭和22年（1947）、K
- 岡田陽編「マッチうりの少女」『アンデルセン童話選集（小学図書館叢書）』玉川大学出版部、昭和22（1947）、K
- 菊池寛訳「幼いマッチ賣り」『アンデルセン童話集』有本書店、昭和22年（1947）、K
- 酒井朝彦訳「マッチ賣りの娘」『マッチ売りの娘（アンデルセン童話集1）』愛育社、昭和22年（1947）、K
- 平林広人訳「マッチ賣りの少女」『アンデルセン童話集1』コスモポリタン社、昭和22（1947）、K
- 矢崎源九郎訳「マッチ賣りの少女」『アンデルセンの童話Ⅰ』青峯書房、昭和22年（1947）、K
- 楠山正雄「マッチ賣りのむすめ」『豚飼王子（あおぞら文庫）』国民学芸社、昭和23年（1948）、K
- 楠山正雄編「マッチうりのむすめ」『世界童話集初級 おさるのめがね』東西社、昭和23年（1948）、K
- 藤井樹郎編「マッチうりの女の子」『アンデルセン童話集（世界名作童話選集）』七星社、昭和23年（1948）、K
- 大畑末吉訳「マッチ賣りの少女」『アンデルセン傑作童話集2』羽田書店、昭和24（1949）、K
- 楠山正雄訳「マッチうりのむすめ」『人魚とお月さま—アンデルセン童話集』小峰書店、昭和24年（1949）
- 長沼依山訳「マッチうりの少女」『アンデルセン童話集』荻原星文館、昭和24（1949）、K
- 大木惇夫「マッチ賣りの少女」『アンデルセン童話集 上（銀の鈴文庫 童話・名作篇3）』広島図書、昭和25年（1950）、K
- 楠山正雄訳「マッチ賣のむすめ」『新訳アンデルセン童話集2』童話春秋社、昭和25年（1950）、K
- 中山一郎訳「マッチ賣りの小娘」『世界童話文庫 別巻6たためになる話の巻』潮文閣、昭和25年（1950）、K
- 与田準一編著「マッチ賣りの少女」『アンデルセン童話集（新児童文庫21）』三十書房、昭和26年（1951）、K
- 鈴木三重吉「マッチうりの少女」『アンデルセン童話集（小学生全集19）』筑摩書房、昭和27年（1952）、K
- 大木雄二訳「マッチうりの女の子」『ひらかなアンデルセンどうわ』金の星社、昭和28（1953）、K
- 大畑末吉訳「マッチ売りの少女」『アンデルセン童話選 下（岩波少年文庫59）』岩波書店、昭和28年（1953）
- 平林広人訳「マッチ売りの少女」『世界少年少女文学全集 21（北欧編1）』創元社、昭和28（1953）、K
- 杉山さんしち訳「マッチ売りの少女」『人魚姫 アンデルセン童話集（外国童話名作集2）』いずみ書房、昭和29年（1954）、K
- 山本藤枝「マッチ売りの少女」『マッチ売りの少女（児童名作全集6）』偕成社、昭和30年（1955）
- 佐藤義美訳編「マッチうりの女の子」『はだかの王さま アンデルセン童話集（講談社の三年生文庫12）』講談社、昭和31年（1956）、K
- 山室静訳「マッチ売りの少女」『少年少女世界文学全集35 北欧編1』講談社、昭和33年（1958）
- 内田英二「マッチうりの少女」『アンデルセン童話集』ポプラ社、昭和34年（1959）、K
- 平林広人・矢崎源九郎訳「マッチうりの少女」『アンデルセン童話集（世界童話文学全集4）』講談社、昭和34年（1959）
- 矢崎源九郎訳「マッチうりの少女」『アンデルセン童話集 ニルスのふしぎな旅 シーネの牛飼い』講談社、昭和37年（1962）、K
- 大畑末吉訳「マッチ売りの少女」『アンデルセン童話全集3』講談社、昭和38年（1963）
- 平塚武二訳「マッチうりの少女」『マッチうりの少女（新編雨の日文庫第2集18）』麦書房、昭和40年（1965）
- 平林広人・山室静・鷹山宇一「マッチ売りの少女」『少年少女世界の文学23アンデルセン童話集』河出書房、昭和41年（1966）、K
- 浜田廣介訳「マッチうりの少女」『アンデルセン童話（ひろすけ幼年童話全集8）』集英社、昭和45年（1970）
- 高橋健二訳「マッチ売りの少女」『アンデルセン童話全集2』小学館、昭和54年（1979）
- 付記 本稿を成すにあたり「国立国会図書館デジタルアーカイブ」を利用させていただいた。また、資料の収集にあたり本学附属図書館には多大のご配慮をいただいた。ともに謝意を表する次第である。

(令和3年9月30日受理)

Stylistic study of a Japanese translation “The little match girl” (1)

ENDO Hitoshi and MIYATA Kaho

Abstract

This paper focuses on the expressions and style of “The little match girl” which has been popular since the Meiji era (1868-1912), especially on the end of sentences, and traces the process of changing from written language to spoken language, and from a “story for reading” to a “story to tell. As a result, it was found that the translated text in “desu-masu style” was completed around the time of the publication of the Iwanami Shonen Bunko in the late 1945s, and has been familiar to people until today. It was also found that the modern colloquialization of the translated text took place more than 20 years earlier than the standardization of the spoken language.

Key words : stylistic study, storytelling, sentence-final expressions, des-mas style, de arimas style